

夕日に  
のびる  
影

## 第1章－武田葵－

---

5月26日8時20分

教室の一番前の席に座って本を読んでいた私に

「ねえ今日遊ぼうよ？」

と、声をかけてきたのはクラスの女子の中でも活発なグループをまとめている祥子ちゃん。

そう言われて振り向いたのは私、武田葵小学5年生

「う…うん、いいよ」

私はそう曖昧にうなずいた。

「そう、じゃあ今日学校終わったら階段の上の神社に集合ね！」

「…うん」

(ふう…今日は何されるんだろう、また痛い目にあったら嫌だな。

傷ができたらお母さんに心配されちゃうよ…)

私は3年生の頃この学校に転校してきたのですが、この内気で暗い性格のためかクラスに馴染めず2年間ほとんど友達ができなかった。

最初に声をかけてきたのは転校初日の自己紹介の後、隣の席の男子拓海くん

「オレの名前は拓海よろしくな！」

「…うん、よろしく」

「お前暗い奴だなーなんだよあの挨拶！もっと元気よくやれよー」

「……………うん」

その後も拓海くんとその友達をよく私に声をかけてくれた。

4年生になって拓海君とクラスが別れてしまってちょっと落ち込んでいた始業式の日、声をかけてきたのが祥子ちゃんだ。

「今日遊ぼうよ？」

そう言って私を誘ってくれた。

しかしその誘いに乗ってはいけなかった、その日を境に私はいじめにあうようになった。

最初のころ私は何がいけないのか全く分からなかったけど、原因は3年生のころよく拓海君と話を  
して仲良くしていたという些細なことだった。

私は何回も言った「仲良くなんかしてないよ、お話してただけだよ」って  
だけど祥子ちゃんは「うるさい、なまいき」といって私をいじめた。

そんな関係のまま5年生になってもいじめは続いた。

最初のころは陰口や足をかけられるなどのベタなものだったが、だんだんエスカレートしていき  
最近では給食のスープにチョークの粉が浮いていたり、階段から落とされそうになったりと酷いもの  
になってきた。

私はいつ大げがするか気が気ではなかったが耐えてきた。

## 第2章－出会い－

---

そして5月26日の放課後…

私は学校から歩いて15分くらいのところにある神社に向かった。

10分くらいあるいたところで後ろから声をかけられた。

「やあ葵さんまた会ったね…ちよっといいかな？」

声をかけてきたのはみすぼらしい格好をしたおじさんかお婆さんかわからないような人だった。

「…え？」

この人にどこかで会った記憶はない。私は怖かったが返事をした。

「あの…人違いじゃないん d」

話の途中でその老人はこう言った

「今日お前さんは死ぬだろう」

「え？」

何を言っているんだろうこの人は？

頭のおかしい人ならかかわりたくないと思ったがこの人は続けてこう言った

「このまま神社に向かうとお前は階段から突き落とされて死ぬだろう」と

…なんでこの人は名前と私が神社に向かうことを知っているのだろうか？

それに「また」ってどういうことなんだろう？

「な…なんで、じ…神社に向かっていることを、し…知っているんですか？」

私は神社に行くことを知っているのが気になったので詰まりながらも聞いてみた。

「そこでお前はかくれんぼをやることになる、そして帰り道後ろから押されて階段から転げ落ちて死んでしまう」

「そんな訳…」

「別に信じろとは言わないが、死んでから後悔しても遅いんじゃないぞ？」

「うっ…」 そりゃそうだ死んでからじゃ遅い。

「じゃ…じゃあどうすればいいんですか？」

「そうじゃの、この紙に書いてあることを実行すれば助かるかもしれん」

「かもしれんって」

しかしこの老人が言っていることがほんとだとすれば、今日私は死ぬ、紙はもらっておいて損はない。

「わ…わかりました、そ…その紙を下さい。」

「ふむ、よい心がけじゃ、しかしただであげるわけにはいかなの」

「えっ…？お…お金なんてないですよ？」

「ふふふお金なんてほしくないわい、ただ手を握ってほしいだけじゃよ」

「たったそれだけでいいんですか？」

「やるのかい？やらないのかい？」

それだけだったらやってもいいかな…

「は…はい、やります。ど…どうすれば？」

「では、目をつぶって私の手を握るのじゃ」

「こうですか…？」

そう言いながら私は老人のしわくちゃな手を握った

「もうよかろう、ではこの紙を授けよう」

そいって老人は私に紙をくれた。

「ああ、それからこの紙はお嬢さんが鬼になった時に開くのだ、決してそれまで見てはいけないぞ」

「鬼になってから？ どうして？」

「まあやってみればわかるじゃろう」

「では、ありがとうございました。」

「では後ろに気をつけてな」

「後ろ？」 歩き始めていた私はすぐに振り返ったがそこにはもう誰もいなかった。

「あれ？あれ？」

いくら辺りを見回してもやっぱりいなくなっていた。

なぜあの老人は名前を知っていて行く場所まで知っていたのだろうか。

なにかがおかしいと思いながらも約束があるので神社に向かった。

### 第3章—かくれんぼ—

神社の階段を登りきると、そこには祥子ちゃん、優子ちゃん、麻里子ちゃんの3人が円を作るようにしゃがみこみなにか相談をしているように見える。

このとき何を思ったかいつも内気な私がこの3人を驚かせたら面白いんじゃないかと思っていることに気づいた。そしてこれから始まろうとしていることがとても楽しいのではないかと胸を躍らせている自分がいることに驚いた。

よし驚かせてやろう！ゆっくり足音を立てずに近付いて行き、

「こんにちは！来たよ！！」と大きな声で言った。

すると「うわっ！！！」と3人とも驚いた顔をして、すぐにこちらを睨んできた。

「武田のくせにおどろかせんじゃねえよ！」と祥子ちゃんが言った。

「ごめんなさい、私誰にも気づかれてなかったからさびしくてつい…フツ」いつもの自分じゃないようにスラスラと詰まることなく日本語がでてくる。なんだろうすごく楽しい。

「なんか今日の武田、違くない？」「たしかに」「なんかいつもより元気だし」

3人はこそこそとしゃべり始めた

「で、今日は何するの？」と、1人になってしまった私は聞いてみる。

「はあ？今日もいつもどおりだよ」

「だけど違う点が1つ今日のはかくれんぼをやりながらいじめてあげる」

…ニヤ、あの老人の言った通りだ。そして私はこれが終わると殺されると…。

フフフあー楽しみ、早くかくれんぼ始まらないかなあ

「おい、祥子なんか武田笑ってんぞ？」「なんか気持ち悪くない？」

「おい！武田何ニヤニヤしてんだよ！！そんなに楽しみか？あ？」

あ一笑ってるの顔に出たのか、まあいいや

「そんないじめられるのに楽しいわけないじゃん」ニヤニヤ

「なんかやばくない？」「今日やめとく？」「ふざけんな今日もやるに決まってんだろ」

「ねえねえ3人でお話してないで私も混ぜてよー」

「うるせえ！きもちわりいからこっちくんなよ！！」

「ひどくなーい？」ニヤニヤ

「もうさっさとやって帰ろうぜ祥子」「そうだよ、祥子今日の武田なんか変だし」

「わかったよ、今日は一回だけでやめてやるとするか」

「じゃあ始めようか、かくれんぼ」

「じゃあルール説明ね、普通のかくれんぼだけど、違うところが一つ、最後まで見つからなかった人の言うことを鬼がなんでも聞くこと！ただそれだけ。」」

「もちろん鬼は武田だから」

「あはは、何それ」「かわいそう」

「うんいいよ、早く始めよう！！」ワクワ

「じゃあとりあえず500数えてから探しはじめてね！」

「ながくね？ww」「たしかにー」

「じゃあいくよー。1、2、3、4、5、……………498、499、500」

さて数え終わったし探しましょうか！と葵は勢い込んだ

「そうだ紙もらったの忘れてた！あははは」

ポケットのなかで綺麗にたたまれていた紙を取り出して開いてみる。

「なになに？ふむふむ。よしこれなら簡単だ！」

## 第4章－麻里子－

---

「さっそく一人目からだね！この紙によると1人目は境内の北のはずれの物置の中」

「うーん結構遠いねー」

まっすぐ物置まで向かい5mくらい離れたところで、立ち止まって観察していると、ゴトゴトと体制をかえているのか少し動いた。

そして手にもった紙をもう一度確認した。

「物置の真正面の大きな木の下を掘れば南京錠が出てくる、か…よし掘ろう」

手で土をかき分けるとすぐに掌サイズの大きな南京錠が出てきた

「おおーこれかー、ではさっそく……」

そう言いながら物置に近付いてその大きな南京錠を物置の扉に鍵をかけた。

「ふふふ……ふふ、あははははははは1人目みつけえー」

ドンドン「ねえいるんでしょ？出てきなよ、絶対でれないからさあー」

ドンドン「ねえどうしたの？なんでなんの反応もしないの？もしかしてまだ見つかってないとか思ってる？それならそれでいいよ、私もう行くからさ。ばいばい！」

ザクザクザク

落ち葉を踏む音が聞こえなくなったのと同時に扉を必死で開けてみる麻里子

ガンガンドンドン「なんなんだよあいつ、やばいよ絶対頭いっちゃてるよ。てか全然開かないよどうしよう。だれかー助けてくれー！おーい祥子ー優子ー？」

ザクザクザク 足音が近づいてくる…やった誰か来てくれた。麻里子はおおきな声で助けを呼ぶ「祥子？優子？どっちでもいいや、ここから出してくれる？」

ドンドン「あははは、わたしだよー麻里子ちゃんやっぱりいたんじゃん。このうそつきー、あはは」

「え？うそ…武田？」

「そうだよ武田だよ。あは、びっくりした？もうそっから出られないんだから頑張ってね！じゃあ今度こそほんとにばいばいだよ…フフフ」

「ちょっとまってここから出してよ、なんでこんなことするの？」

「なんでこんなことするって？私は1年以上お前らにいじめられてきたんだよ！」

「わかったよ、もうしないからほんとにもうしないから、ここから出して。」

「今更何言われてもねえ」

「お願いします、なんなら私がいじめられてもいいからここから出して下さい」

「ふーんいじめられてもいいんだ。じゃあなんで今まで助けてくれなかったの？」

いじめられてもいいなら「やめてあげなよ」くらい言えたでしょ？」

「そ…そうだけど」

「まあほんとに今更だけどね」

「どういうこと？ねえなにが今更なの？」

「じゃあヒント、この南京錠のカギはどこにあるでしょう？」

「え？カギ？それは武田がもってるんじゃないの？」

「残念でした、正解は・・・その物置の中でした、あははは」

「な…か？」

「そうその中にあるはずだよ？よく探してみな」ニヤニヤ

ゴソゴソ「これは…」

「うそ、中に入ったらでれないじゃんどうしてくれんのだよ」

「あははは、だから今更だって言ったじゃん。カギがあるのに出れないなんてかわいそうだね」

「いや、いや—————」

「まあ麻里子ちゃんあんたが一番ましかもね。」

「だして、だして—————」

「じゃあ、ばいばい…フフフ」

「だして—————」

ザクザクザク「あんなやつどうでもいい、さて次は2人目だよ」

歩き始めると先ほどの物置らへんから気配がした。

「ん？…なんだろう今、見られてた？」



## 第5章－優子－

---

「んーと次は・・・なるほど、御神木にできてる穴の中か」  
あんなとこに穴なんてできてたんだ。知らなかったな、それにここの神社に来たのって確か3歳くらいの時だったし全然覚えてないや。  
それからすぐこの神社が潰れちゃったから、7～8年放置されたままか。  
「あ！見えた、あの木がそうだね」ニヤ  
ザクザクザク「優子ちゃんみ一つけた、きゃはははは」  
びく「くそっ見つかったー」「んで、私が最後？」  
「ううん、違うよ二人目だよ」  
「チッ、中途半端だし最悪だよ。もういいさっきのところに戻ってるから。」  
「うん、わかった。じゃあ、後ろに気をつけてね！！あははは」  
ザクザクザク…「え？」  
優子が振り向いた時には遅かった。  
カナヅチは、勢いよく振り下ろされ優子の後頭部にめり込んでいた。  
倒れこむ優子に葵は言った  
「だから気をつけてねって言ったのに。きゃははは」  
ドサッ「なんでこんなこと…」  
「みんな言うんだね、なんでこんなことって。自分たちでやってきたことの報いだよ。あはは」  
「ヒドイ…」  
気を失ったのか死んだのかわからないが、とりあえず紙に書いてあることをやらないと  
ズルズルズル「さて…こんなもんか！できたー！！」  
「起きてー！朝だよー！」  
「おーい、起きろって言ってんだろ！」ドサッ  
「グフツ…」  
「あ、起きた！おはよう優子ちゃん。あははは」  
「あ…葵？なんで・・・？」  
「ねーねー頭から血が出てるよ？痛いよ？ねえ痛いよ？」  
思い切りグーで殴ってみた。  
「……………」  
「あらら、また気を失っちゃた。」  
「おーい、おーい。」  
「ウツ…」  
「お！今回は早いね。」  
「やめて…」  
「やめないよ。絶対に！」  
「そうだ、丑の刻参りって知ってる？」  
「牛…なに？」  
「丑の刻参りだよ、ほら夜中に藁人形を木に打ち付けて呪うやつ」

「知ってるかも…」

「じゃあやってみようよ！」

「え？だって藁人形がないじゃない。」

「でも、釘とカナヅチは、あるよ！あはは」

「うんだから人形が無いって！！」

「うるさい人形！きゃはは」

「えっ…」

「では、時間は早いけど参りましょう！」

「そんなこと言たって私が逃げればできないじゃないのよ。」

「逃げれば、ね？」

「あ…あれ？なにこれなんか紐が、くそっ、はずれない！」

「さっき気を失ってた時、私が結んどいてあげたよ！きゃはは」

「ちくしょう、はずれるよ！」

「無理だと思うよ？3本も体に巻きついてるからね。」

「手のところだけでもとれれば…」

「じゃあちょっと形のおかしい人形だけど釘を打っていこうかな！あははは」

「やめて！！！！お願いだから。お家に帰してー」

「そうだ、どこから打ってほしい？」

「いやーいやーやめてください」

「もううるさいなー、じゃあとりあえず肩とかいってみる？」

「だめだめ、そこは、だめ」

「じゃあどこならいいんだよ！！！！」グサツ

「きゃあああああああああああああああああああ」

「あはは、どうしたの？まだ右肩だけじゃん。次左もいくね。」

「お…ねがい…しま…す…やめて」

「せーの」グサツ

「あああああああああああああああああああああああああ」

「なんかさっきと同じリアクションだしつまんない。」

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い」

「ふふふ…目とかいってみる？それとも一気に心臓いっちゃう？」

「死にたくない死にたくない死にたくない」

「だから目か心臓どっち？って聞いているの」

「どっちもいやあああああああああ」

「うーんそんなわがまま言われてもなあ」

「決める？決めない？決めないなら私が決めちゃうよ？」

「殺さないで。お願い殺さないで…」

「うるさいなもう。じゃあ私が決めてあげるっ！！」グチャ

「—————っ！！！！！！うぐぐぐ…」

「おお、新しいリアクションいいね！きゃははは。どう、右目潰された感覚は？」

「……………」

「ありや？」

「おい、またか…もういいや。つまんないから心臓いっちゃおう。待っててね祥子ちゃん」  
グサッ

「……………」ポタポタ

「あはははははははは、楽しいなあ」

「ふふふ…よくやりますね。」

## 第6章 一祥子一

---

「ちよっとはしゃぎすぎちゃったな…反省、反省。あははは」

「祥子ちゃんに気付かれちゃったかな？」

紙をポッケから取り出し次の指示を見る。

（後ろを見よ）

「ん？どうゆうこと？」

葵はヒラリと後ろを向いた。

そこには、どこからでてきたのだろう祥子が立っていたのである。

「あれ？祥子ちゃん、なんでそんなところに立ってるの？かくれんぼなのに隠れないとゲームが成り立たないよ？あははは」

「そんなこと、どうだっていい。葵何してるの？」

「なになって、かくれんぼだよ？祥子ちゃんがやろうって言ったんだよ？」

「そんなことわかってる。だけど、なんで優子を殺す必要があるの？」

「あれ？見てたの？きゃはは」

「見てたの？じゃないわよ！あんな悲鳴と笑い声が聞こえれば誰だって見に行くわよ。」

「ふーん。まあ見られちゃったんだったらいいや。祥子ちゃん…あなたも死んで？きゃははは」

「ねえ、葵あなたどうしちやったの？」

「ん？なにが？どうもしないよ？」

「どうもしないって、あんたそんな風に笑ったり、しゃべったりしないじゃん」

「そーかなあ？いつもこんな感じだったと思うけどなあ？」

「ああ、そうだ祥子ちゃんどんな風に死にたい？」

「私も優子みたいに殺すの？」

「あははは、あんな簡単に死ぬると思ってるの？」

「簡単って…優子があんなに苦しんでたのに」

「あんなものじゃすまさない、絶対に」

祥子は怖くなり、階段へと逃げだした。

「ちいつ…」

「私のほうが断然足が速いんだよ、葵？追いつけるわけじゃない」

「きゃはは、どーしよーこのままじゃ逃げられちゃうよー」

「なんなのあいつ、まだ笑ってる…」

「まってよー、祥子ちゃん」

「こっち来るな…きゃつ」

もうすぐ出口の階段というところで後を警戒しながら走っていた優子は何かにつまずき転んでしまった。

「なんなのこれ？…タコ糸？なんでこんなものがこんなところに、来たときはなかったのに。まさか…」

「なんで地面に寝転がってるの？祥子ちゃん、あははは」

「あんたでしょ、このタコ糸、木と木の間に結んだの」

「タコ糸？知らないよ？そんなの用意してるわけないじゃん。」

「えっ？あんたじゃないの？じゃあ誰が・・・」

「でもね、こんなのは用意してあるよ…あはは」

葵は、後ろで組んでいた手を前にだすと、包丁が握られていた。

「なんでそんなも・・・」

祥子は起き上がろうとするが、それよりも早く葵は包丁を振り下ろし、祥子の太ももに深く突き刺した。

「ぎゃあああああああああああああああああああ」

「ふふふ…痛い？ねえ痛いの？？あはは」

「痛く…なんかないもん」

祥子はそう言いながら立ちあがろうとするが、葵は背中に蹴りを入れられまた地面に倒された。

「あはは滑稽だね、いつもの強気な祥子ちゃんはどこいったのかな？」ニヤニヤ

うずくまっている祥子に葵はそう声をかけ、おもむろに太ももに刺さっている包丁を引き抜いた。

「きゃあああああああああああああああああ」

「きやははははは…ああ面白い。ねえねえ次は何して遊ぶ？」

「はあはあ…ちくしょう葵のくせに・・・」

祥子は恍惚とした表情の葵を睨む。

「うんうん元気でいいね。いつまでその元気を保てるかな？」

「ふふふ…いつまでもだよ、あんたから逃げ切れるまでね！」

「ねえ祥子ーなんで笑ってるの？むかつくよ」

また包丁を振り下ろす葵だが、祥子はなんとか体を捻りそれを避け手首に蹴りを入れた。

「くそっ」

手首を蹴られた反動で葵は包丁を地面に落とす。

「よしっ！」

今がチャンスと祥子はその包丁を拾い上げようと手を伸ばす。

しかし・・・「うぎゃあああああ」ゴキキ

伸ばした手の肩口をカナヅチが叩く。

「—————っ！！！！！！」

葵は悶絶している祥子に近づいてしゃがみこみ、耳元でこう言った

「ねえ痛い？きやははははは」

「それと、今何しようとしたのかな？包丁なんか持ったら危ないよ。」

「ちがう、何もしようとしてない。手が勝手に…」

左手で肩を押さえながら祥子はそう言った。

「そうかこの手が悪いんだね。じゃあ使えなくしないとね。あはは」

なんとか逃げようとするが、ふとももを刺された祥子は立ち上がれず、そして右手も動かすことができずに悶えていた。

「じゃあまだ使える左手から先にね！」

「いや、やめてえええ」

思い切り振り降ろされたカナヅチをなんとか避けようと手を引いたが少し遅かった。

キキ「うぐううう」

手の甲を狙った葵のカナヅチは狙いが外れ中指と薬指をへし折った。

「よけちゃだめだよー」

「・・・・・・・・」

「あれ？気絶しちゃったの？ふふふ、のんびり寝てていいのかな？」

そう言いながら立ちあがりさつき落とした包丁を取りに行く葵。

「おりやあああああああああ」

気絶したふりをしていた祥子が最後の力を振り絞りよろけながらもタックルをかました。

「きゃあ！」

重なるように転んだ葵と祥子、しかしすぐさま上に乗る祥子を蹴り飛ばし立ち上がる。

「ちくしょう、姑息な真似してくれちゃって。ああ、お洋服汚れちゃったじゃない。」

「もういい、殺す」

そう言い包丁を拾い上げ、転がって仰向けになった祥子のお腹めがけて馬乗りになった葵は包丁を突き刺した。

「や…やめ——————みやぎやおおおお」

一度刺した葵の手は止まらない。

「この！この！おらおらおら」

なんどもお腹に包丁を突き刺し祥子のお腹からは血とともに、生暖かいなにかがあふれ出ていた。

「・・・・・・・・」

そのころにはもう祥子はなにも発しなかった。

「はあはあはあ」

動かなくなった祥子をどこか悲しげな表情で見下ろす葵。しかしすぐに元の表情に戻り

「ねえ…痛い？苦しい？」

と耳元で囁いた。

「これで終わりだ。よし帰ろうお母さんが待ってるし。」

返事をしない祥子を残し、オレンジ色に染まる神社を背に階段へ向かった。

## 第7章 別れ

---

葵は、階段に向かう途中でポケットに入っていた紙をもう一度みてみた。

「なんだったんだろうこの紙」

こんな正確に指示が書いてあり、みんなその通りに行動するなんてとても不思議だった。

紙を見ていると、一番下の段に最後に見た時にはなかった一文が書いてあることに気づいた。

「なんだろうこれ？さっきはなかったよね？」

最後にはこう書いてあった。

・ごくろうさまでした、以上で儀式を終わります。お気をつけてお帰りください

「んー儀式って何のことだろう？まあいいか。」

「こんな気持ち悪い紙捨てちゃおう。」

そういいながら葵は、紙をくしゃくしゃに丸めて草むらに投げ込んだ。

そして階段の前に辿り着き、もう一度後ろを向き今日あったことを思い出し、明日からの自分が今までの自分より、幸せになることを決意した。

「今までの自分にさよなら。こんにちは新しい私。これで邪魔なやつはいなくなった…ふふふ・

・ふふ、あはははははははははは

笑いながら階段を降り始める葵は、後ろからの足音に気付く余地はなかった。

「ふふふお嬢さん自分だけ明日も生きられると思っていませんか？」

「…えっ？」

後ろから声をかけられとても驚いた表情の葵がこちらを向く。

「やお嬢さん！あなたのおかげで、私はまた生きながらえることができましたよ。ふふふ」

「だ…れ？」

「おやおや、私の顔を忘れてしまわれたのですか？ははは…まあ無理もないでしょうこんなにつるつるピカピカになったんですからね。」

そこに立っていたのはみすぼらしい格好をした青年だった。

その恰好で葵は気がついた。

「あのときのおじいさん…なの？」

「そうですね、あの時はおじいさんでしたね。ふふふ」

「う…そ、なんで？どうして？」

パニック状態に陥った葵を見て青年は微笑んでいた。

「では、また生まれ変わったらお会いしましょう。」

そう言って青年は葵の体を静かに押した。

「いやっ…きやあああ」

そして夕日に伸びた青年の影は消えた。

「ああどうしてこんなことに…」

葵は時間の流れがゆるやかになったかのように、ゆっくりと階段から落ちていく感覚の中冷静に考えた。

「私はどうしたらよかったんだろう。ああそういえばあの時おじいさんは【後ろに気をつけて】って言ってたな。このことだったんだ。」

薄れゆく意識の中、なぜ名前を知っていたのか、「また、会ったね」の意味とか答のでない疑問をいだきながら葵の意識はそこで日没のようにゆっくり途絶えた…。



## 最終章ーそして再びの出会いー

---

少女4人が人気のない古ぼけた神社で惨殺された事件から80年後のある日…  
とある道端でぼろぼろの服をきた老人が少女に声をかける。

「やあ葵さんまた会ったね。」

「…え？」

END